

第1部 2016年度共同研究報告

研究報告①
ドイツのサッカー事情
—ドイツ中部地域のクラブ事情—

明石真和（駿河台大学経済経営学部）

司会 第1部、最初に「ドイツのサッカー事情」というテーマで、明石経済経営学部教授にお話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

明石 こんにちは。明石真和と申します。本来、ドイツ語の教員なのですが、サッカーも好きのため、長い間、本学のサッカー部の部長を務めておりました。

今日はドイツのサッカークラブについてお話します。用意した資料が2枚ございます。ひとつは、ドイツの有名なクラブの所在地や組織について整理したものです。これを中心にお話しさせていただきます。

もう1枚は、昔、NHKのテレビ『ドイツ語講座』で月刊テキストに1年半連載をしていた時のものです。今日の研究対象であるフランクフルトを取り上げた回がありましたので、参考資料というよりは読み物として、ご自宅で読んでいただければ幸いです。

今日のシンポジウムは、スポーツの中でも特にサッカーを取り上げておりますため、第1部、第2部の時間の割り振りも大枠で45分ハーフというイメージであります。若干の延長があるかもしれませんが、PK戦までは延びないと思います。

調査対象として、なぜフランクフルト周辺を選んだかといいますと、よく知られた名前の町であること。また日本からドイツに直行便で行くと、大体フランクフルトに着くことが多いというのが、まず第1の理由です。つまり、比較的日本人になじみのある町ということです。2つめの理由は、共同研究者の野田先生、それから私もそうなのですが、フランクフルトの

隣町マインツにドイツ人の指導教授がいるということです。我々にとって気持ちのうえで親近感のある地域ということになります。

3つめとして、大都会フランクフルトを中心として、マインツその他の中規模都市があるという位置関係です。何となく東京を中心とした埼玉、神奈川、千葉というイメージに似ているのです。スポーツクラブと地域の関係を考えると、「東京とその周辺の県や町」と比較すれば、とらえやすいかと思います。

まずはドイツ全土を地図で見ますと、南にはミュンヘンがあります。強豪チームFCバイエルンのある町ですね。北へ行くとハンブルクとベルリン、それからドルトムントやデュッセルドルフのある西部地区。旧東ドイツの地域には、ドレスデン、ライプツィヒといった有名な町もごぞいます。

フランクフルトとその周辺のマインツ、ヴァースバーデン、オッフエンバッハ、ダルムシュタット等々は、ちょうどドイツの真ん中にあたる部分ということになります。いずれも有名なサッカーチームがあります。

今述べました周辺の各都市は、ドイツの州でいうとヘッセン、ラインラント・プファルツ、それからバーデン・ヴュルテンベルクの、三つの州にまたがっています。たとえば、東京をフランクフルトとすれば、その周辺に埼玉県とか千葉県がありますが、まさにそういったイメージなのです。

そのうえ、フランクフルトにはドイツサッカー連盟の本部があります。東京に日本サッカー協会があることと同じです。このサッカー連盟の本拠は、最近、手狭になってきたというわけで、フランクフルトの町中に新しくドイツ・サッカーアカデミーという総合施設が計画されています。サッカーに関するすべての情報の収集や発信、また最新のトレーニングの研究と実践をしようということで、2020年—21年を目標に造っています。

このドイツサッカー連盟は、世界で一番の会員数を持つといわれるスポーツ組織です。権力を持っているというとおかしな言い方ですが、国内外に強い影響力をもち、指導的な役割を果たしています。

「組織的に」、「一貫して」というのは、ドイツ人の好きな言葉です。一貫してサッカーを発展させるためのいろいろな方策を練っているということで、今後とも注目していきたいと思います。ドイツはDFB（デーエフ

表1 フランクフルト周辺地域の著名クラブ (2017/18シーズン)

	創立	会員数	所属リーグ	所属日本選手
1FFCフランクフルト	1973年	100人弱	女子BL 1部	(元)永里 (今)横山
E.フランクフルト	1899年	45,000人	BL 1部	長谷部・鎌田
FSVフランクフルト	1899年	2,500人	地域リーグ	
オフエンバッハ・k.	1901年	2,600人	地域リーグ	
1. FSVマインツ05	1905年	13,500人	BL 1部	(元)岡崎 (今)武藤
ダルムシュタット	1898年	8,000人	BL 2部	
W.ヴィースバーデン	1926年	630人	BL 3部	
ホッフェンハイム	1899年	8,470人	BL 1部	

バー) という略語で知られる「ドイツサッカー連盟」を覚えてください。日常いたるところで結構出てきます。

サッカー連盟は全ドイツ的な団体ですから、ひとまず置くとして、では、この地域の著名クラブを見ていきましょう。(表1)

まず1FFCフランクフルト。これは女子だけのチームです。日本選手の永里さんが所属していました。今は横山選手がおります。そのほかは、各クラブ内に男女のチームがあります。一番有名なのが、アイントラハト・フランクフルトです。女子の1FFCを除いて、だいたい1900年前後の創立ということで、もう100年以上の歴史をもつクラブがごろごろしている。フランクフルト周辺で、ドイツの全国リーグであるブンデスリーガの1部、2部、3部に所属しているか、あるいはかつて所属していた8チームを並べてみました。1FFCフランクフルト(女子チーム)、アイントラハト・フランクフルト、FSVフランクフルト、オフエンバッハ・キッカーズ、マインツ、ダルムシュタット、ヴィースバーデン、ホッフェンハイム。次に会員数を見てください。

1FFCの100人は別として、アイントラハト・フランクフルトが45,000人、マインツが13,500人。一番最後のホッフェンハイムというチームは、最近、ブンデスリーガでも強豪チームとして名が広まってきたのですがど

も、会員数が8,470人です。実はこの町は人口が3,000人ぐらいいかないのです。ほんとうのドイツの田舎町です。ドイツサッカー連盟と共同して、新しい育成システムを試験的に取り入れたところ、ぐんぐん強くなって、今、世界最先端といってもいいような育成組織を誇っております。人口は少ないし、会員数も多くはないけれども、ちょっと注目されているチームということで、ご記憶ください。背後に資金力のあるスポンサーSAP（ソフトウェアの大手企業）がついていることも見逃せません。

逆の例が、フランクフル트에隣接したオフエンバッハにあるキッカーズというチームです。昔はとても強かったです。第2次大戦後、日本に初めて来たドイツのチームも、このキッカーズ・オフエンバッハです。オフエンバッハ市は川越市の姉妹都市としてご存じの方が多いかもしれません。ここのかつての名門チームキッカーズが、今は上から4番目の地域リーグにまで落ちてしまいました。

ライバルであるアイントラハト・フランクフルトは、相変わらず1部に定着しています。ですから、アイントラハトを教師、オフエンバッハを反面教師と言うと失礼なんですけれども、そういった捉え方ができるかもしれません。財政面をはじめ、いろいろなことが理由にあるのだと思います。それぞれ事情を抱えながら、それでも存続の努力を続けている、そういったクラブチームがこの地域にも多数あるということです。

会員数とクラブ運営にはどのような関係があるかといいますと、ドイツ全土を見てみますと、会員数5万人以上のクラブは、ドイツには7つあります。一番の強豪と呼ばれるFCバイエルン・ミュンヘンは284,000人もの会員がいます。15万人のドルトムント、14万5千人のシャルケ、ケルン（94,300人）、ボルシアMG（83,000人）、ハンブルクSV（76,507人）シュトゥットガルト（56,000人）と続きます。会員ではないがファンだという人はこれよりさらに多いでしょうから、かなりの人数がそれぞれのチームを支援していることでしょう。ちなみに、フランクフルトは45,000人で8位で、9位が1980年代に奥寺康彦選手が所属していたブレーメン（36,500人）です。

ブンデスリーガというドイツの全国リーグが1963年に開始されてから、

研究報告① ドイツのサッカー事情—ドイツ中部地域のクラブ事情—

今年55シーズンめに入っているのですが、過去54年間の通算勝ち点が多いチームは、バイエルン、ブレーメン、ハンブルク、ドルトムント、シュトゥットガルトという順です。これはそのまま会員数と相関関係が見てとれます。強いからこそ会員が常に集まってくるという言い方もできるでしょう。あるいは、クラブ運営を、それなりにうまくやっているのはこのあたりのチームだよ、ということも言えると思います。ちなみにフランクフルトは9位です。大体、5万人前後かそれ以上の会員数を誇っているところが、結果として強豪として残っているわけです。その意味ではブレーメンは頑張っているとも言えるわけですが、今回の対象地域ではありませんので、これ以上は触れません。

次にクラブ所在都市の人口です。①フランクフルト（72～73万人）②ヴィースバーデン（27～28万人）③マインツ（20万人）④ダルムシュタット（15万人）⑤オッフエンバッハ（12万人）⑥ホッフェンハイム（3250人）。フランクフルト周辺は、ドイツ中部の人口集中地域ですが、そのなかでホッフェンハイムの3,250人というのは、いくら何でも少ないなという気がします。それが今、最先端の育成組織を誇っているということでご理解ください。

リーグ組織が、ドイツ全土としてどうなっているかといいますと、全国統一ブンデスリーガの1部、2部、そして2008年から3部ができて、一応ここまでがプロということになります。その下に、上から数えて4番めのリーグに当たる地域リーグがあります。4部（地域リーグ）から下は、5部、6部と続いていくわけですが、すべてそれぞれの州、群、市、町内……での活動になります。9部以降は地方によって若干構成に差があります。

それでも、とにかく全国各地、すべて総当たりのリーグ戦が行われています。いろいろな地域にたくさんのクラブがあって、それが全部きちんと組織だってリーグができ上がっている。毛細血管のように全国に広がっているということになります。

例えば、われわれの周辺でイメージしていただければ、FC飯能とかFC入間みたいなクラブがあるとしますと、その周辺の子供たちが、そこでボールをけり始める。その中から、「彼、うまいよね」と目立つ選手が出

てくる。すると、だんだんプロのスカウトが来たり、あるいは選手のほうが自主的にもっと有名なクラブへ移ったりして、自然にふるいにかけていき、最後はブンデスリーガのプロになる。さらには代表選手にも選ばれるというわけです。

ちなみに、2014年ブラジルのワールドカップでドイツは優勝したわけですが、その時の代表選手23名は、もちろん全員プロ契約で、みんな有名なチーム所属です。でも、この23人のうち、最初から著名チームのユースや下部組織に入っていたのは、たった2、3名なんです。残りの約20名は、町の小さなクラブでボールをけり始めた。そこで、だんだん才能が開花して、スカウトに目を付けられ、有名クラブへ移っていったというわけです。

ワールドカップでの優勝後、ドイツサッカー連盟は、選手が最初に所属していたすべてのクラブに、お礼を述べていった。ちゃんと気を遣って、「あなたのクラブがこういう選手を育ててくれたので、ドイツが優勝できました」という具合に、気配りをしていった。普段は大ざっぱなドイツ人の割には、そのあたりをきちんと押さえて、実行しているという気がします。

ドイツ全土にアマチュアクラブが今25,000チームぐらいあるらしいのですが、ドイツサッカー連盟が、それらすべてに援助金として総額500億円程度を用意したという話を聞きました。「お金があるんだな」という感想は別として、このように組織的にさまざまな手を打っていくというのが、ドイツの一つの強みかなという気がしています。

ともかく、全国的に上から下まで組織化されたリーグ戦があり、また年齢区分がはっきりしているのです。案外知られてない部分かもしれませんが、例えばアイントラハト・フランクフルトを例に挙げますと、その一番下が7歳以下、その上に8/9歳、10/11歳、12/13歳と年齢別に続きます。下部組織として、これだけしっかりしたものができ上がっているわけです。それぞれの学年でというか、年齢で、シーズンを通してのリーグ戦が行われているわけです。

日本の場合で考えてみますと、あまりリーグ戦は想定されていないのです。中学、高校レベルのほとんどの大会が勝ち抜き戦のため、そんなには

研究報告① ドイツのサッカー事情—ドイツ中部地域のクラブ事情—

公式試合ができない。逆にドイツでは、クラブ所在地を中心に、シーズンを通して20試合ぐらいのリーグ戦が組まれているんですね。しかも、ホーム&アウェイです。こういう点が組織としてしっかりできているのが、ドイツの強みという部分があります。別にドイツの強さや良さを云々しているのではなく、地域に根差しているという点に注目してほしいのです。今日の例はあくまでフランクフルトとその周辺ですけれども、ドイツ全土でも同じような構成になっています。

もちろん有名クラブや規模の大きなクラブになればなるほど、その運営にはお金がかかります。そこで、今はスポンサーが大事になってきます。パートナー企業と呼んでいるところが多いです。大クラブは、スポンサー、パートナー企業なしには考えられません。

代表的なところを一覧表にしてあります。女子の1FFCフランクフルトは、フラポート（飛行場）、ライン・マイン交通、コメルツバンク（銀行）、ブーマ、アリアンツ（保険）、ヘッセンLotto（くじ）等々です。E.フランクフルトは、ナイキ、クロムバッハー（ビール）のほか、投資会社、保険会社、ガス・電気の企業、ヘッセンLotto（くじ）、フラポート（飛行場）、ライン・マイン交通、フランクフルト信用金庫 等です。

マインツは、アウディ、ラインラント・プファルツLotto（くじ）、ビットブルガー（ビール）、ガス・電気の企業等。ダルムシュタットは、ヘッセンLotto（くじ）、メルク（地元の化学品、医薬品メーカー）等。ヴィースバーデンは、ブリタ（浄水器）ナイキのほか地元の家電や投資の企業 等。

ホッフェンハイムは、大手のSAPのほか、Lotto（くじ）、アウディ、ハイデルベルク信用金庫、コカコーラ、ビットブルガー（ビール）等です。

有名なチームになればなるほど、大手のスポンサーがつくわけです。2部、3部リーグの所属でも、それなりに地元根差した企業が協賛してくれています。例えばビール会社、あるいは銀行、それがスポンサーとなっていることがお分かりいただけると思います。

例えて言うと、われわれがFC飯能というチームを作って、ここに地元の銀行や企業が協力してくれる、そんなイメージでしょう。ユニフォームに名前を入れてくれる。育成面にお金を出してくれる。これが今のドイツ

では普通になっています。1960年代後半、あるいは1970年代から少しずつその傾向が現れてきました。

そろそろまとめに入ります。今日一番お伝えしたかったのは、実は次の点です。日本との比較で考えてみますと、スポーツ活動に関しては、「クラブ主体のドイツ、学校主体の日本」という図式になります。

ドイツの場合、サッカーのクラブと学校や就職活動との関係はどうなのか。これ全部、無関係とは言わないけれども、それぞれ独立して縦割りになっています。スポーツやサッカー活動で言いますと、下部チームから上がって行って、年を経ていくごとに、クラブの年齢別チーム、17歳以下だとか19歳以下というようなチームで、サッカーを続けていく。

学校は、それとはまったく別個に存在している。学校へは勉強に行き、例えば、クラブは週3回、月、水、金などに3時から5時サッカーの練習に行く、週末はリーグ戦の試合です。こんな風に、クラブ活動と学校の勉強は、全く別個のものとしてやっている。そんな感じです。では、就職はどうするのか。それもまた別の話で、学校とは協力している部分がないわけではないですけれども、クラブとはさしあたり関係がない。ドイツでは、割合早いうちから将来自分が何になるかを決めて、専門学校に通って技術を身につけていく。週に何回かは希望する職種の現場で実習をする。このあたりが比較的すっきりした形で成り立っています。

逆に日本はどうか。小学校、中学校、高校、大学、そのつど、クラブ活動をどうしようか……という問題が出てくる。あるいは、大学になると就職活動と呼ばれるものが入ってくる。常に、リセット、リセットで動くため、非常にロスが多い気がします。ドイツのように、サッカーはこちらのクラブで、勉強は学校でというなら話が早い。

フランクフルトを中心とした地域にも有名、無名を問わずにクラブチームが無数にあり、それぞれに独自の取り組みをしている。学校はまた別の話。これがドイツの特徴かなと思います。

日本との比較でいえば、では、われわれに何ができるのかなと思うわけです。学校主体でずっとやってきた日本の組織ややり方を、いきなりドイツのようにしようというのは、ちょっと無駄な努力だと思います。今ある

研究報告① ドイツのサッカー事情—ドイツ中部地域のクラブ事情—

形から、学校として何ができるのか。またどんな問題があるのか。それを今後の課題として考えていくほうが实际的でしょう。

スポーツ活動という点から見れば、シンプルだけれどもがっちりした一貫性のあるドイツの組織に比べて、日本の方は、やはり学校中心ということで、それなりの問題点があるわけです。そのあたりを、今日の後半の先生方のお話の中から、日本との比較でイメージしていただけるとありがたいです。

さらに言えば、私は、ドイツと日本は、形の上での組織だけでなく、互いの国民性に一番の大きな違いを感じています。ドイツの人はとにかく負けず嫌いです。スポーツやサッカーをやっている連中は、特にそんな気がします。日本人は、そういう意味では、非常に淡白な気がします。何でも徹底的にやるのがドイツ一つの国民性です。

このあと、先生方からどこまでそういうお話が出てくるかは分かりませんが、まずは、導入部ということで、私がフランクフルト周辺のクラブチームについて、簡単にご紹介させていただきました。最後に、現地で撮った写真がありますので、何枚かお見せします。

立派な練習場で、写真は19歳以下の試合前の練習風景「南西部地区19歳以下のリーグ戦」のひとつです。



写真①：アイントラハト・フランクフルトの育成センター



写真②：元日本女子代表の永里選手



写真③：マイnitzの武藤選手

背景になっている練習場は市営グラウンドです。例えば3時から5時はこの女子プロチームの練習だとすれば、5時近くなりますと近所のおばさん、おじさんがランニング姿で集まって来て、ジョギングが始まる。時間でしっかり区切られ、施設の有効活用がなされているということです。選手の練習着の胸を見ていただければ分かりますように、ここにもスポンサーが付いていることが分かります。

練習の後、「ちょっと写真、いいですか」とお願いして撮らせてもらいました。



写真④：マインツ時代の岡崎選手



写真⑤：日本代表の主将長谷部選手

これは武藤選手の前年です。ドイツでは、練習後に、比較的簡単に選手と接することができます。

胸に「アルファロメオ」と書いてあります。その後、スポンサーが変わり、今ではまた違ったユニフォームです。

みんなドイツ代表選手です。こんなふうに、ワールドカップに出るような一流選手が、それぞれの地域に根差して活躍しています。

日本のように、まずは「花のお江戸に出て勝負して、その後に世界を目



写真⑥：バイエルン・ミュンヘンのシュバインシュタイガー選手



写真⑦：ラーム選手

指す」という形ではなく、地域に根差したまま、一気に世界へ飛び出して行く可能性がある。これが、「地方分権のドイツ」の大きな特徴かと思えます。

余談になりますが、ドイツのスポーツ雑誌に載った記事を紹介します。フランクフルト周辺地域の20歳以下のリーグに、中国の20歳以下の代表チームが、送り込まれてくるというのです。ドイツサッカー連盟と中国のサッカー協会が協力体制で合意したのかもしれませんが。2020年の東京オリ



写真⑧：トーマス・ミュラー選手

ンピックを見越して、その世代の育成を図ろうと、20歳以下の中国代表選手たちがこのドイツ南西部地域の地域リーグに入ってきて修行するということですね。日本の強敵になるかもしれません。そんなニュースを聞きましたので、紹介させていただきました。私の話は以上です。ありがとうございました。